

肯否要求質問に対する省略返答

内田 安伊子

1. はじめに

質問と返答というやり取りは、私たちの日常に頻繁に登場する言語活動である。「質問」は、どのような情報を求めるかによって、発話者（以下、質問者）の前提が異なり、さらにこれが形式上に明確に示される。質問には、「それ、誰の本？」のように、ある命題を構成する概念のうちの一部を同定するよう求める場合と、「それ、田中さんの本？」のように、命題全体が成立するか否かを判定するよう求める場合とがある。本研究では、後者のタイプの質問を取り上げる。そして、このような質問に対する返答の中で、「多分。」のように文に満たない形式の返答を観察し、その解釈について考察を行う。

2. 省略返答とは

2.1 肯否要求質問

本研究で「肯否要求質問」として扱う発話は、一般に「真偽疑問文」「yes/no 疑問文」などと呼ばれている。質問文に提示した命題とそれを否定した命題のうち、成立するのはどちらか、を尋ねる質問である。次の例(1)は、「それは田中の本だ」と「それは田中の本ではない」のどちらが成立するか、を尋ねる質問である。

(1)それ、田中さんの本？

2.2 省略返答

返答とは、質問で求められている情報を提供する発話である。件の本が田中の本である場合、質問(1)に対する返答はこのことを表していなければならないが、用いる形式としてはいくつかの種類が可能である。

(ア)うん。

(イ)そう。

(ウ)多分ね。

(エ)名前、書いてある。

これらの形式はすべて「それは田中の本だ」という

命題を表しているとは解釈することができ、返答としての機能を果たしているとみなされる。以下では、これらが表している命題「それは田中の本だ」を「成立命題」と呼ぶこととする。

肯否要求質問に対する返答には、上に挙げた(ア)応答詞による返答、(イ)指示語「そう」を用いた返答、(ウ)語句による返答、(エ)質問に示された命題とは別の命題による返答などが見られる。本研究では、これらのうち、(ウ)「多分ね」のように語・句・あるいは節による返答を省略返答と呼んで、第3章ではその全体像を観察し、第4章ではそれらから成立命題が以下に解釈されるのかについて考察を行うこととする。

3. 省略返答の観察

3.1 統語上の特性

省略返答には次の(3)~(7)のようなものがある。

(2)試験、うまくいった？

(3)多分。

(4)全然。

(5)と思う。

(6)残念ながら。

(7)完璧に準備したから。

先に定義したように、省略返答とは語・句・節による返答である。この場合の節は、例(7)のように接続助詞を伴うか、あるいは述語がテ形で終わる物を指す。

これらの返答を聞いたとき、聞き手（質問者および談話参加者）は、返答(3)(5)(7)からは「試験はうまくいった」、返答(4)(6)からは「試験はうまくいかなかった」という命題を、それぞれ理解するだろう。このように省略返答から成立命題を理解することができるのは、省略返答が成立命題と共に作る一つの文が想定されるからである。返答(3)~(7)の場合には以下ようになる。

(3)多分 [試験はうまくいった]。

(2)試験、うまくいった？

(3)多分。

(4)全然。

(5)と思う。

(6)残念ながら。

(7)完璧に準備したから。

①否定と呼応するか。

→呼応する ⇒ [否定命題] が成立 (4)試験は全然大丈夫じゃなかった。

→呼応しない ⇒ ②推論による解釈ができるか。

→できる ⇒ [肯定/否定命題] が成立

(a) 因果関係を利用 (7)完璧に準備したから試験はうまくいった。

(b) 返答者の評価を利用 (6)残念ながら試験はうまくいかなかった。

→できない ⇒ 省略要素復元の原則により [質問に提示された命題] が成立

(3)試験は多分大丈夫だった。

(5)試験はうまくいったと思う。

る。返答(4)「全然」にはこの性質があるので、成立命題は否定命題であると解釈される。第二段階は、②推論を利用した解釈の可能性のチェックである。推論には②種類あり、返答(7)のように、省略返答で述べられた内容(完璧に準備した)と成立命題(試験はうまくいった)とに因果関係が認められて、この関係を利用することができるものと、返答(6)のように、成立命題に対する返答者の評価(試験がうまくいかなかったことは残念だ)を利用できるものがある。①②どちらのチェックにおいても外れる場合には、「先行文脈に存在する形式をそのまま復元する」という省略要素復元の原則を当てはめることができる。返答の場合、先行文脈とは質問文であるので、先行文脈に存在する要素とは質問文で提示された命題ということになる。そして、これを成立命題として解釈する。

4. 今後の課題

本研究では、省略返答として機能する様々な形式を観察し、そこから成立命題を解釈するプロセスについて考察をおこなった。本研究の分析対象は発話の形式であったが、実際の場面での発話の解釈には音声要素や身振りなどのノンバーバルな要素が関連

することは言うまでもない。今後は分析の範囲を広げ、それらの要素との関連についても考えなければならない。

また一方では、冒頭で見た(ア)うん、(イ)そう、(エ)名前書いてある、などの返答との比較も行いたいと考えている。省略返答を含め各タイプの返答が用いられる文脈には相違があるのか。あるとしたらどのような相違か。このような問題を明らかにしていきたい。

参考文献

- 近藤泰弘(1997)「否定と呼応する副詞について」川端義明・仁田義雄(編)『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 中右実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
- 西原鈴子(1987)「話者の価値判断」『国語研究所報告』90
- Okamoto, S. (1985) *Ellipsis in Japanese discourse*. University Microfilm International.

うちだ あいこ/早稲田大学日本語研究教育センター

a-uchida@mwa.biglobe.ne.jp